三川鉱で起きた――落盤災害に思う

せめて保安守る闘いだけでも
全労働者の統一を願う

CO患者家族　石原マサ子

悪夢のようなあの三川鉱落盤災害から、一カ月たちます。故吉田哲郎さんはじめ、一家の大黒柱であるご主人や息子さんを無残にも殺されなさったご家族は、怒りと悲しみの毎日だったと思います。

つい先日、三池炭鉱は一年間無事故ということで表彰されたばかりでしたが、実際には瀕死の重傷者を出す事故が絶えず起きていたので、私たちCO患者家族は「今に大きな事故が起きねばよいが……」と心配していた矢先に、今度の災害だったのです。

×

「三川鉱で落盤事故が起き、六名の坑内労働者が生き埋めになっている」、と聞いたときには、「またか」という驚きと怒りで、一瞬息がとまる思いでした。

なかでも、吉田哲郎さんは四十三歳という働き盛りで、最後まで三池労組で頑張った人でした。闘いなかばに無残にも殺され、どんなにか心残りだったでしょう。

また村上安紀男君は、小さいとき私達と同じ地域の班に住んでいて、私の子供達の遊び友達でした。吉田さん宅のお通夜のお参りをすませてから、元近所に住んでいた人達とそのお通夜にかけつけましたが、まだ父親の死もわからぬ子供さんが、にこにこしながらとちとちと歩きまわる姿を見て痛ましいやら、腹が立つやら、言葉がありませんでした。

老後を託していたひとり息子を殺された老夫婦。「こげんこってあるかナー」、とおっしゃったお父さんの一言がいつまでも耳の底に残っています。

またお母さんが、「どうか安紀男の顔を見て下さい」とお棺のフタをあけて見せられ、「顔が変形したところを、蠟で固めてあっとよ」といわれました。何というむごいお姿か。聞けば、現場に馴れていない電気と機械の係の人だけに、しかも二―三番の交替の間に仕上げなければならない作業をさせていたのだそうです。まさに、こんどの落盤災害は、起こるべくして起きた災害であることはだれの目にも明らかで、会社の責任は逃れようがないことです。ところが会社は、遺族の皆さんに対して謝るどころか、「会社の責任かどうかはまだわからない」などと公言したといいます。トシ老いたご両親も、「これでは安紀男があまりにもかわいそうで……」といわれましたが、ほんとに何という会社かとあきれずにはいられません。会社は、死人に口なしで、おおかた係員になったばかりの村上さんにでも責任をおしかぶせるつもりかも知れません。

合同社葬の後、三池労組は抗議集会を開き、会社現地の三人の幹部に対して会社の責任を確認させ、そして、遺族の今後について十分考えることを約束させましたが、その翌日会社代表は遺族に対して「災害は会社の責任でした」と言明したそうです。

だからといって、死んでいった人達はもう生き返ることはないのです。二度とこのような災害をくり返させてはなりません。三井資本に生産第一主義、保安は第二・第三という態度を許す限り、今後も災害は必ず続くと思います。

願うことは、三井鉱山の炭鉱に働く労働者全員が、せめて保安を守る闘いだけでも一緒になって闘うことです。それがなければ、命や健康を守ることは不可能なことではないでしょうか。

亡くなられた方々の冥福をお祈りするとともに、みんな一緒になってがんばりましょう。

×

筆者は、CO患者家族の会の会長です。

山野遺族会の定期総会に出席して

CO患者　佐藤勉

七月十二日午後一時より、筑豊の稲築町公民館において、山野炭鉱ガス爆発事故遺族会の第六回定期総会が開かれ、三池の原告団を代表して永江さん、西原さん、それに私の三人が参加しました。

山野裁判が、三池と違い遺族一本で取り組まれている現実を、痛いほど切実に感じました。裁判闘争を、各人が全く自分のものとして真剣に取り組んでいられるという事にびっくりしました。前期からの繰り越し金が三百万円。それに諸経費を含め八百七十三万円余りにもぼる数字の大きさ。

「来年は結審の見通し」、と角銅弁護士よりの説明を聞いて、山野裁判では原告の一人ひとりが、ほんとうに裁判を自分のものとして、強い信念で闘ってこられた事を思い、改めて敬意の念を禁じ得ませんでした。

私と山野との関係は、また特別なものがあります。実は、あの山野爆発での、私の弟の死があるからです。こんど、弟が残した子どもと会うことができました。幼き日の面影こそあるにもせよ、今成人したその子どもに出会ったとき何もいう言葉がありませんでした。ただ一日も早く良き伴侶を見つけて結婚し、育ててくれた母への孝を怠たらず、いつまでもよき娘であって欲しいと思います。

三池と違ってさらに厳しいたたかい。山野遺族会の皆さん、いつまでも同じ原告団として歩調を合せ、連帯し、裁判勝利の日まで闘ってゆこうではありませんか。

原告団消息

6月18日　坑内火災裁判公判。原告団、みいけ編集委員会。
19日　CO患者、厚生年金未取得者集会
21日　CO患者＝本裴裴助さん
　　天領病院退院。二十二日より出勤。
25日　吉田・曙病院々長と懇談。
26日　CO患者家族の会役員会。
27日　CO患者＝平川隆雄さん、曙病院入院。
30日　CO患者＝中尾種夫さん、銀水園を退院。
7月1日　原告団事務局会議。
2日　CO患者、厚生年金未取得者会議。
3日　原告団、みいけ編集委員会
10日　全国労災職業病討論集会。
12日　山野炭鉱遺族会総会。
　　CO患者＝伯川良一さん、定年のため退職。
17日　原告団役員会議。茨城全逓と交流。
18日　CO患者＝上島乾さん、曙病院入院。
20日　CO患者＝松藤嗣治さんも同右。
31日　三池大災害裁判公判。

まなぶの友から ××××××
CO患者家族へ便り

三池にまなぶ婦人集会には、全国からたくさんの働く婦人がおとずれてきて交流しています。これらの婦人の友から、これはCO患者家族に寄せられた心暖まる便りです。

――石原軍喜・マサ子さんへ

「先日はお忙しい中、心よく受け入れて下さいましてありがとうございました。御主人様がCO患者で、たいへんご苦労があられるのに、『仲間の支えがあるから、笑って人ごと見たいに話せるのです』、とおっしゃったことが、とても印象に残りました。

今の社会の中では不安がいっぱいで、人間らしく生活できません。こんなとき仲間と話し合い、正しい方向に解決の道を切り開く知恵を出し合っていくと、石原さんみたいに展望もって生活できるのですね。

何か一歩前に出れない所がありましたが、私も頑張ります」（鹿児島市門和四丁目一七二七―三三**中村充子さんから**）

――猿渡ハギエさんへ

「先日は、いろいろとお世話になり、ありがとうございました。あまりの親切に、こちらが面くらってしまうようでした。

六十四歳とは思えないはりきりように、かえってこちらが若返ったみたいです。ことばの一つひとつに、長い闘争の重みが感じられました。

これから大変です」（山形市城西町四丁目二二―二三、丸福荘、**大境節子さんから**）

――同じく猿渡さんへ

「その節は大変お世話になり、ありがとうございました。

二十三日の帰り、熊本空港発高松行きの飛行機が欠航で、仕方なく新幹線で帰りました。その足ですぐ、労大高松教室に行きました。講師は塚元さんでした。一日に二回も塚元さんの話が聞けて幸わせです。

友だちと、塚元さんの人柄のように、運動を続けることで人間も造られる……、といいながら帰りました。

早速今回の集会の報告を、高松市役所まなぶ友の会で発表しました。全員、三池に是非行きたい、行って猿渡さんと話したい、といってました。

くじけそうになったとき三池に学んだことを思い出し、また三池に行ったときの感動をいつまでも持ち続けたいです」（香川県香川郡香南町吉光一〇六九の二、**小比賀順子さんから**）

――同じく猿渡さんへ

「お伺いした二日目は強い雨でしたが、家族同様に甘えさしていただき厚くお礼申しあげます。

それに、タクシーで戦跡を案内していただき、巨大な三井独占資本の本性を目で見、肌で感じ、体がふるえる程の怒りをおぼえたことを思いおこしております。

同じ体制的な攻撃をうけ、職場を奪われ、生命を奪われ、健康を破壊され続ける国、有林の職場から、私たちも反独占の闘いをおこしているとはいいつつも、直接目に見えない敵への怒りが本物にならないでいました。しかし、労働者を搾取し続けて肥大化する巨大資本を目の前にして、あらためて闘うしかないことを決意できたと思います。

四日間の三池の生活は、本当に家庭のぬくもりが感じられ、親せき以上の心のふれあいができたことを信じています。このぬくもりの中から、私ははっきりと、反独占・社会主義をめざす労働者根性をまなぶことができました。私も婦人部組織の役員をにない、運動の中でともに、闘う仲間をふやしていきたいと考えています。

ぜひ山形にお出かけいただける日をお待ちしたいものです」（山形市十日町三―二十二三、**松沢キウさんから**）

――忠地義高さんへ

「家族同様に面倒を見ていただき、三日間があっという間に過ぎました。甘えて何もお手伝いせずに、おまけにお風呂では背中まで流していただいて、ありがとうございました。

あっそうそう、ヘチマのタワシもったいなくてまだ使っておりません。母も〝なつかしいね〟と眺めております。

綾ちゃん、勉強部屋を占領してしまってごめんなさいね。

綾ちゃんは、お母さんにゆかた地の、素敵なホームドレスを作ってもらっていいですね。この頃はお母さんの手作りの服を着れる子供はあまりいませんよ。私はいいことを教えてもらったので、この夏の終りのゆかた地のバーゲンセールを狙っています。

ミーちゃんとも、もう少しで仲良くなれるところでしたのに残念です。

最後になりましたが、ご主人様が少しでも早く良くなられますように。爆発から二十年の月日が流れているのに傷跡が深く、交流の中で改めて思い知らされました。資本は何事もなかったかのように肥え太って労働者を搾取し、労働者の生命と健康をうばい続けています。許せないと思います。こんな社会は一日も早く、終りにしなければなりませんね」（島根県浜田市長沢町一七二―八、**出島千鶴子さんから**）

――妻の加津枝さんへ

「先日三池炭鉱の落盤事故が伝えられ、怒りに燃えています。私の職場（プリマハム）も今、北陸支部に組合つぶしともいえる配転攻撃がかけられ、生活を守るため必死に闘っています。

私のところ（秋田）にも、少人数の第一組合員を狙いうちしています。まわりの第二組合員は、話をするのもいやなほど残業の毎日。クタクタのようです。それでも文句もいわず働かざるを得ない姿をみると、闘う組合でないと、労働者は生命も生活も守れないことがはっきりしてきました。

これからもがんばりますので、今後ともよろしく」（秋田県本荘市松ケ崎字荒田北側一六〇、**佐々木幸子さんから**）

おわびとお願い

編集部へ、皆さんから寄せていただいた全国各地からのお便りが余りにも多かったので、積み残しが出ました。本号には、おさまらなかったのです。

ぜひ、次号に紹介させていただきますから、しばらくお待ちくださるようお願いします。

このようなお便りは、まだまだほかにもあろうかと思います。ご提供いただき、こうして紹介し、そして命を守る闘いの火を広げたいものです。よろしくお願いします。

――編集部